

第33回福岡県美しいまちづくり建築賞 受賞作品概要

総評・講評 選考委員長 田上健一（九州大学大学院芸術工学研究院教授）

◆総評

優れた建築を表彰することにより、美しいまちづくりの促進を図ることを目的として制定された本賞は、今年で33回目を迎えました。

本賞では、「住宅の部」と「一般建築の部」の各部門で「大賞」および「優秀賞」が授与され、またリフォーム・リノベーション作品を対象として（一財）福岡県建築住宅センター「理事長賞」が授与されます。本年度は「住宅の部」33件、「一般建築の部」39件、計72件の一般公募による応募が寄せられました。選考は10名の選考委員による慎重な審議を経ていきます。

第1次選考委員会は9月15日に開催され、応募書類をもとに「住宅の部」の候補4作品、「一般建築の部」の候補4作品、「理事長賞」候補3作品を選出しました。また、第2次選考の現地審査は11月20日と11月23日に実施され、建築の内部・外部空間および周辺環境の視察を行うとともに、設計者・施工者・建築主等の関係者から説明を受けました。本年は新型コロナウイルス対策のため、選考委員を2つのグループに分け現地審査に対応し、第2次選考の現地審査終了後に全員による最終選考委員会にて各受賞作品を選出しています。

「住宅の部」では、戸建住宅3作品、集合住宅1作品の4作品が第1次選考を通過しました。いずれも地域社会との関係性や新しい住まい方を主題としており本賞に相応しいものでした。「大賞」を受賞した「浦志の家」は控えめな建築表現でありながら、細やかなランドスケピングが高く評価されました。優秀賞の「楽市のアパートメント」は、厳しいローコスト条件下で低層分棟・高密度・変形路地型の集合住宅を実現しました。

「一般建築の部」では、「嘉麻市庁舎」「大楠アリーナ 2020」「MARUHON FUKUOKA」「近鉄博多ビル」の4作品が第1次選考を通過しました。今年度も質の高い建築作品が残り選考は難航しました。大賞の「嘉麻市庁舎」は、矩形の彫刻的意匠と周辺自然環境との調和や、開かれた市民サービスのための空間的実践が評価されました。優秀賞の「大楠アリーナ 2020」は、アリーナの開放性・閉鎖性の両義性を高レベルで実現したことが評価されました。他の2作品は僅差で及びませんでした。

「理事長賞」には、「いろどり整骨院」「福岡市美術館リニューアル」「九州ヴォイス」が最終選考に残りました。こちらも力作が揃いました。11月6日の現地審査を経て「いろどり整骨院」が受賞しました。

なお、本賞は福岡県が主催し、単に視覚的に目立つとか話題性を表彰するというのではなく、社会的かつ文化的に優れた建築を表彰することにより、建築文化への理解を深めることが趣旨となっています。また、「美しいまちづくり建築賞」という名称が示すとおり、建築単体ではなく地域の価値向上に貢献することが評価の条件です。今後も、この制度が良質な建築ストックの醸成に繋がっていくことを期待致します。

住宅の部 大賞

浦志の家

●設計趣旨

敷地は糸島市内に位置する二方向道路に面する角地。既存樹木を中心とした植栽帯により、外部からの視線を遮りながら、緩やかに街と繋がり、内部からは豊かな緑を感じられる庭と一体となった住まいである。建築のボリュームを抑え、低く長い軒により慎ましやかな佇まいにするとともに、全体高さを抑えることで北側隣地に建つ両親の住まいに配慮し、また相互に行き来が出来る配置計画とした。木材は九州産を使用し、地産地消による地域活性化にも寄与出来、玄関ドアや一部サッシも木製とすることで、経年変化を楽しむことが出来る。小さいながらも性能と意匠のバランスがとれた、内外一体となる居心地の良い居場所が点在する住まいとなった。

●講評

大通り沿いにはスーパーマーケットやパチンコ店が立ち並び、隣にはドラッグストア。一方で、裏通りには古くから残る住宅が点在。仮設的で一時的な賑やかさでまちが成り立っている、そういった雑然とした郊外住宅地に「浦志の家」は在ります。

住宅としてはコンパクトで控えめな建築表現ではありながら、ボリューム感の低減、研ぎ澄まされたプロポーション、屋根勾配、地域産木材を用いた外壁のほどよいおさまり、明快なプランニング、手仕事を感じられる内部仕上げなど、全体に無理のない上質な作品です。

特に、既存樹木を中心とした植栽、ひろびろとした縁側、アプローチや玄関などの半屋外空間により地域・庭・住宅の境界融和が図られています。コミュニティの存在に気づくことさえも憂えられる場所で、郊外住宅地の空隙を逆手に取る手法を試み、この細やかなランドスケイピングが高く評価されました。

実は、現地審査にて、裏手にあるご祖父母がお住まいの母屋との関係性の中でこの住宅が成り立っていることがわかりました。失われて久しい「生活のしかた」や「お隣さん」といったやわらかなつながりの醸成を知ることになり、このことが多くの審査員の共感を獲得しました。



撮影：八代写真事務所

一般建築の部 大 賞

嘉麻市庁舎

●設計趣旨

遠賀川の畔に建つ嘉麻市新庁舎の計画である。

2016年4月の熊本地震直後に計画が始まり、合併特例債活用期限である2020年3月竣工が求められていた背景と、遠賀川沿いの豊かな敷地環境が計画の大きな特徴であり、これらの時代背景・地域環境に対して純粹に応答することがこの市庁舎建築の姿勢としてふさわしいと考えた。

安心・安全性確保とイニシャルコスト縮減を両立した合理的なデザインを追求した結果、無駄なものが削ぎ落とされたコンクリートの「矩形」が残った。嘉麻市の原風景である遠賀川とその先に広がる水田や山並みの豊かな緑の中、このコンパクトな「矩形」の市庁舎を彫刻的に佇ませることで、嘉麻市の新たな景観の創出を目指した。

●講評

合理性を突き詰めた矩形の構造体は、のどかな風景の中に佇む彫刻的モニュメントのような存在感を現しています。

四周をめぐる3.6m×3.6mのアウトフレームによる架構空間は、まるでルネサンス期に建てられた屋根がかかる吹放しの半屋外空間ロτζアの立体積層化のようです。ロτζアが曖昧な機能の空間でありながら、使い手や目的を定めずに数百年間も維持されてきたことにも似た強度を感じます。このような空間形式はさまざまな世代や人々が同時に存在できるという懐の深さの表現であり、内部の活動が周りに表出することも可能となります。地域の新しいシンボルとしての庁舎にふさわしい空間形式・建築言語なのかもしれません。

写真で感じた一見過剰にもみえるアウトフレームの仰々しさは現地では感じられず、むしろ周囲と馴染みながら、その姿は地域の風景と向き合っています。

敷地内外を一体的につなぐ全体計画、市民サービスと執務スペースのゆるやかな連続性、吹き抜けや垂直動線による立体構成、日射制御をはじめとする環境への配慮なども高いレベルで実現されています。内部のサインやファニチャーなども細やかに設えられました。



撮影：八代写真事務所

住宅の部 優秀賞

楽市のアパートメント

●設計趣旨

地方都市に建つ10世帯の木造メゾネット型賃貸アパートである本計画は、造作によるディテールの積み上げではなく標準ディテールを多用することでコストを抑えながら、いかに空間性を与えることができるかをテーマに据えるとともに、要望でもあった外部空間を日々使われる空間とすること、及び外部空間による住環境の見直しを行った。

変形敷地に沿わせるように分散させた住戸群に外部空間を織り込みながら配置することで、外部空間は視線の方向性がぼかされるように伸縮を繰り返し、路地状の空間に陰影の移ろいを映し出す。

刻々と変化する外部空間を通して入居者の生活感が住戸群の中に拡がる風景こそ、集まって住む豊かさになると考えた。

●講評

市街地と農村のあいだの郊外にある「楽市のアパートメント」の周辺には、おそらくハウスメーカーや地元の在来工務店が建てたであろう、その姿はほとんど同じである低層アパートメントが散在しています。「楽市のアパートメント」は、こういった画一的なアパートメントとは対比的な、低層分棟・高密度・変形路地型の集合住宅です。

多方向からのアプローチ、住棟を分節する2～4mほどのスリット路地、不規則なテラスの配置は、それぞれの住戸の採光や通風を確保するだけでなく、クロスメゾネット形式によって複雑に絡み合う住戸の住み手相互の交流の場にもなっています。それぞれの住戸内部にも、多様な光と心地よい風の流れが感じられます。

限られた敷地の中で屋外環境との近接性・親和性を高め、住み手の小さなスケールでの生活の場所の発見や自主的なコミュニティ活動を育む提案には、まさに「まち」が感じられ、新しい郊外居住の価値が創出されることが期待できます。

厳しいコストの制限下で、既成の工業化製品を吟味し全体を構成したことも、多くの審査員から支持を集めました。



撮影 : Kouji Okamoto(Techni Staff)

【一般建築の部】 優秀賞

大楠アリーナ 2020(九州産業大学)

●設計趣旨

九州産業大学の創立60周年を記念して計画された、スポーツ、式典、研究など様々な利用ができる約5000人を収容可能な複合型アリーナである。

大学のシンボルツリーである楠の大樹をモチーフにデザインし、新たなランドマークとなることを目指した。ガラスカーテンウォールにより構成したショーケースのような建築は、内部で繰り広げられるアクティビティがあふれ出す「オープンアリーナ」である。

林立する樹木形状の柱や大階段、吹抜により、屋内外が立体的につながるシームレスなデザインとすることで、視線がつながり、活動がつながる、コミュニケーションを誘発する交流の場を創出した。

日が沈むと象徴的な柱が浮かび上がり、都市の夜景に華を添える。

●講評

大学キャンパスのエントランス近く、幹線道路に接する都市の景観と密着した場所に位置しています。

82.5m×45mの広さで5000人を収容できる国内有数の大型アリーナでありながら、敷地段差の利用、樹木のつらなりを連想する軽やかな構造体、連続するガラスカーテンウォールによる透過性がスケールの大きさと重量感を消し去っています。

最大限に空間的・視覚的開放性を確保したオープンアリーナは、建築のランドマーク性に加えて、自然換気や居住域空調などの環境への配慮、樹木形状の柱や斜格子による屋根架構など施工技術の高さも高く評価されました。

コロナ禍のまただ中で現地審査に訪れましたが、内部で大学生が距離を取りながらスポーツを楽しむ光景に、大学施設・都市施設としての現代的必要性和、あらためてこのような施設の空間的・視覚的開放性の重要性を感じます。いずれは市民に開放されていくというこのオープンアリーナでは、キャンパスに集う学生とともにさまざまな人々が時間を共有し、開かれた場としてさまざまなセレンディピティの発現が予見されます。



撮影：Kouji Okamoto(Techni Staff)

(一財) 福岡県建築住宅センター理事長賞

いそどり整骨院／住宅

●設計趣旨

本案は、汎用的なハウスメーカー住宅を素材とした職住一体の生活環境の再構成、及び、空き家解消や設計事務所の新規市場開拓という「素材としてのハウスメーカー住宅」の可能性に対するケーススタディである。

内部では、整骨院併用住宅の従来用途の枠を超えた防災や育児セミナー、ワークショップ、マルシェ、料理教室、物販など多目的かつ半公共的用途により、外部とのシームレスな繋がりが必要とされた。一方外部には巨大な御神木と公園の唯一無二の景観があり、公園の抽象化・再構成により内外を連続させた。露出された既存構造と新規造作物を等価に扱い、ズレや重なり、流動性や回遊性等、綿密な計画により唯一無二の空間創出を目指した。

●講評

リノベーションとは決して妥協の産物ではなく、創造的な建築行為であることがあらためてわかります。

鉄骨5mグリッドの大手ハウスメーカーによる新構法（新築当時）を存続させながら、隠れていたこの骨格を痕跡として顕在化し、対比的なマテリアルとディテールを持ち込むことで、双方が重なり合う見事な空間再編を実現しています。

再編された空間は、住宅の地域社会への開き方、近代以降分離されて続けてきた職と住の一体化、時間経過による価値の増殖など、現代住宅が超克すべき課題解決の方向性を示しているようです。

隣接する公園の緑との連続性を意図したアプローチや開口面といった境界のデザインは、内外部に十分なみずみずしさを与えています。

地域活動にも積極的な若い世代の住まい手により、この住宅が時間の経過とともに一層の豊かさを帯びていくことが予見されます。また、細やかな工夫を重層化した若手設計者の力量も高く評価されました。



撮影：©Yousuke Harigane